

# な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
編集  
なかま編集委員会  
〒285-0025  
佐倉市鏑木町 198-3  
電話 (043) 485-1801

馬鈴薯の花咲く頃 ----- 清澤 瞳子 散歩 ----- 伊藤 稔子  
お食い初め ----- 宮武 孝吉 蛍 ----- 林 久子

## 初めてのまちづくり

三 田 俊 郎

市民カレッジのまちづくり活動で、私は目的を福祉関係に絞り、学童保育所で絵本と紙芝居の読み聞かせをするグループに入りました。図書館司書の方から絵本の選び方と読み方についてお話を聞き、絵本を借りて、読み聞かせを行いました。私の班はAさんとSさんの3人です。建物は意外と広く、中に入ると床がピカピカでした。児童は1、2年生が多く40人程度でした。児童はとても礼儀正しく、元気で目が輝いていたことが印象に残りました。

正直自信のない初心者の私でよかったのかと胸がドキドキしました。トッパッターは私です。題は『ありとすいか』物語は家族がピクニックに出かけスイカ一切れを残して帰ります。それを見つけたア리가試食して「これはうまいぞ、菓に運ぼう」と言うところから始まり、楽しく一生懸命菓に運んで終わる物語です。ア리가菓の中で様々な仕事をしているところや、たくさんのお菓子が立って走って行く場面はワクワクします。また大型絵本に「おー」と声を上げる子もいてそれだけでわけもなく嬉しくなりました。終わると拍手をしてくれたので、少し恥ずかしい気持ちと、ほっとした気持ちでいっぱいになりました。

次はAさんの紙芝居『とうちゃんありがとう』です。自動車が入り始めた昭和の高度経済成長期、お父さんが子供に自動車に乗せてあげるといふ約束をします。子供は辛抱強く待つて、ついにマイカーでドライブに行く物語です。家庭の温かさや、お父さんへの尊敬が伝わってきます。この紙芝居を選んだAさんの気持ちの子供たちに届くといいなと思いました。

(編集委員)

## 馬鈴薯の花咲く頃

お向いの五坪程の庭には、四季折々の花が咲き、我が家からの眺めは格別。六月の今、白つつじ、矢車草、マーガレット、フランネル草、そして馬鈴薯迄も咲く。この庭をみていると、石川啄木のうたが浮かんでくる。

馬鈴薯のうす紫の花に降る雨を思へり都の雨に  
馬鈴薯の花咲く頃となれり  
けり君もこの花を好きたまふらむ  
函館の青柳町こそかなしけれ友の恋歌矢ぐるまの花  
また八幡台の住宅地のアカシアの街路樹、続く印旛沼の土手の数本のポプラ、草ぶえの丘のバラ園に咲く浜薔薇と身近かなところで思い出されてくる。

アカシアのなみきにポプラに秋の風吹くがかなしと日記に残れり  
潮かをる北の浜辺の砂山の  
かの浜薔薇よ今年も咲ける

や

また家の近くの公園の柳が芽吹いてくると

やわらかに柳青める北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに

五十数年前函館に住んでいた頃、母と一緒に、金田一先生の「啄木研究講座」に参加したことがあった。

石川啄木は、明治19年岩手県の寺に生まれ、明治45年4月13日、家族、若山牧水らにみとられ、27才の若さで永眠。浅草等光寺で葬儀。函館での4ヶ月と言う短い生活の中で数々のうたを詠み、立待岬には一族の墓がある。墓には、

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむると刻まれ、見おろす大森浜の啄木の像の台座には、浜薔薇のうたが刻まれ、花も植えられていた。生誕126年の今も、数々のうたは色褪せることなく私の心の中で生き続けている。

(井野 清澤 瞳子)

## 散歩

私は気が向いた時に、佐倉城址公園から周辺をよく散歩する。この公園は地形的に起伏に富んでおり、運動面においても格好の場である。それゆえに、付近の中学生や高校生、アスリートの人たちが、汗を流して階段を昇り降りする姿をよく目の当たりにする。

そして、嬉しいことにその姿が私に元気を与えてくれる。一方、最近、目立つのが歴史の研究や観光で遠方から訪れる人たちである。また、身体のリハビリ、犬の散歩、ピクニックなどで大勢の人たちに愛されていることがよく分かった。

それから、天気の良い日に散歩すると思わぬ観察が出来る。以前より背丈が伸びて、首を傾げてくる樹木があり、蕾のときは赤だったのに、花が咲いて白くなる変化を見つ

けて驚く。そして、野鳥のさえずる中、眩しいほどに木々の間から差し込む木漏れ日の行きつく場所を確かめ、又、クモの巣の巧妙さに驚かされる。しかも、雑草の花畑に足を踏み止めてばかりで、一向に前に進んで歩けないことが多い。

散歩は、自分の本能が示した方向に自然と歩き出す事と運命的な私の体験である。だから、あちこちと自ら進んで道に迷って行く方が楽しくて刺激的である。そして、見知らぬ人たちと会話できた時などは、何やら心が和むものである。

これからの私は、新しい発見を見い出すために、目を輝かせながら、気の向くままに散歩したい。

家の周りから町に出て、野であろうと、山や海であろうと、自由奔放に……

(鏑木町 伊藤 稔子)

## お食い初め

亀を飼っている。娘が子ども頃に飼っていたもので、大学生の頃は連れ歩いていたが、就職して実家預かりとなった。冬の間は冬眠で動かないが、春になると目をさます。今年4月9日、もういいかなと思つてイトミミズをやると、食べた。今年のお食い初めである。そこでエビをやると、もっとよこせとばかりに口を開いてせびる。

例年だと4月後半から少しずつ食べ始めるのだが、今年早い。そう言えば、今年は桜の開花も早かったが。

亀の餌やりは面白い。箸で与えるのを食べるのが好きで、始めは水面に落ちたのには見向きもしないで、箸やりをせがむ。可愛いものだ。

暑くなるにつけ食欲が盛んになり、9月の末頃から食べなくなる。晩秋から春まで、冬眠期間は長い。

以下、私が書いた詩です。

### 亀

人影が見えると  
急いで近寄つて来て口をあけ  
餌をねだる  
片手で相手を払い  
自分に先に寄せとアピール  
しあう  
好物の乾燥イトミミズを与え  
ると  
両手両足をバタバタさせて喜  
ぶ

捨てられた犬、捨てられた鶏、  
捨てられてわが家に辿り着き、  
庭の段差を這い登ろうとして  
いた子犬、  
もらわれてきた子猫、など  
様々な生き物と付き合ってきた  
が  
亀もなかなかの愛嬌者である

二十二歳になる

お正月

おせちのエビでも

お裾分けしてやりたいが

亀は今

冬眠中である

(上志津原 宮武 孝吉)

## 蛍

「あつ、光ってる」「あそこにも」子供達のはしゃぐ声の方を見ると、三、四十輝にのびた稲の中に、うす青い光が点滅している。ほんのわずかな光なのに、何と美しいのでしょうか。いつも明るい電灯の中で暮らしている私達の眼には青白く儂ないような光は、この世のわずらわしさを忘れさせ、遠い世界を思わせる光です。すうっと頭の中を光りながら飛んで消えていった。高い木の中にもいくつかが光っている。飛んでいるのは雄の蛍で、いい相手を見つけてるのでしようか。

私の子供の頃は、町をはずれば、どこにも蛍が見られ、小さな蛍籠とうちわを持って夏の夜を家族で楽しんだものでした。籠の中に二、三匹の蛍を入れて帰り、部屋に張った蚊帳の中に放すと、青白い光をびかりびかりさせて、蚊

帳の中では大き過ぎる子供達も、じっと光を追って静かにしていました。五十年前の日本の家では、今のような殺虫剤などなくて、夏になると、どの家でも蚊帳をつつて寝たものでした。今では見たくても見られない光景です。

今は蛍の棲む川や田んぼは農薬を使うので蛍も少なくなりました。この田んぼは持ち主が農薬をまかず、蛍を守ってくださいるとか、そのお蔭で暑い夏の夜の一時を優雅に過ごすことが出来るのです。

万葉集の中に、「蛍なす」と言う言葉があります。これは「ほのかに」にかかる枕詞だと書いてあります。万葉人は蛍をどんな思いで愛したのでしょうか。私は月の光が蛍に移ったような気がしています。

(稲荷台 林 久子)



## 6月の黒板

# 『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市錦木町198-3

URL [http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0\\_1.html](http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html)

### わぐの道

30年前の3月に佐倉に越してきた時、家のすぐ前で鶯が鳴くのを聞いて感動した覚えがある。また5年程前の夏の夕方、犬の散歩の途中、時鳥の鳴き声を聞いた。「トッキョキョカキョク」と聞こえたから確かに時鳥だったと思う。『枕草子』では「鶯は声も姿も上品でかわいらしいが、夏秋の末まで鳴いて聞き苦しい点があるのが気に入らない。

もつとも、すばらしい鳥だと思っからこそおこる不満ではあるが。時鳥は初夏しか鳴かず、卯の花や橘などに半ば隠れているのも、六月に鳴かなくなるのも全てすばらしい」（要約）と評している。鶯と時鳥に対する作者の見解と私のそれとは少し違うが、平安朝の宮廷社会での会話を想像しながら、両方の鳥の鳴き声を聞き比べるのも楽しい。（猪俣 民子）

### あとがき

編集委員を拝命して、あつと言う間に3年が過ぎ去った。最後の年を迎え、気持ちも新たに有終の美を飾りたいと思う。

さて編集会議では、投稿者の意図や書きぶりを出来るだけ尊重し、「てにをは」や表記上のルールといった必要最小限の修正に留めるようしている。

一番頭をしばるのは、作者には判っているが表現が曖昧

なため読む者にとって意味が取りにくい文章である。結局書いた本人に真意を確かめることになる。これを避けるためには第三者に読んでもらい、疑義を生じさせる部分がないことを確認してから脱稿するのが良い。

次に「です、ます」と「である」が混在した文章が目立つ。日本語は話し言葉と書き言葉が違う厄介な言語であるが、そこに編集会議の存在意義がある。

（田村 孝則）